

Vol.7
2016年
秋・冬号

上町台地 今昔タイムズ

企画・編集: U-CoRo プロジェクト・ワーキング 発行: 大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)
問合せ先: tel.06-6205-3518 (担当: CEL 弘本) ※U-CoRo=ゆーこー (上町台地コミュニケーション・ルーム)
http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html

「上町台地 今昔タイムズ」とは

わたしたちが暮らす「上町台地」。古代から今日まで絶えることなく、人々の営みが刻まれています。天災や政変や戦災も、著しい都市化も経験しました。時をさかのぼってみると、まちと暮らしの骨格が浮かび上がってきます。自然の恵みとリスクのとらえ方、人とまちの交わり方、次世代への伝え方…。過去と現在を行き来しながら、未来を考えるきっかけに、U-CoRoプロジェクト第2ステップでは、壁新聞「上町台地 今昔タイムズ」を制作いたします。



天王寺区に生まれた日本画家・生田花朝の作品「春昼」。神社の境内で遊ぶ子どもたちの姿がモチーフ。生涯にわたり大阪の市井の人々の生活文化を描いた。(昭和38(1963)年、大阪市立美術館蔵)

子どもたちの遊びにもなった人形浄瑠璃

明治生まれの女性、日本画家の生田花朝(1889-1978年)は、大阪の庶民の暮らしの風景を回廊し柔らかな筆遣いで描いています。生國魂神社の絵馬堂で、昔の子どもたちが遊びに興じる様子を描いた作品もその一つ。パイ貝のコマ回しに熱中する子どもたちの周りに、生玉人形を持っている子の姿(左端)が見えます。

江戸時代から明治・大正・昭和へ、時代の移り変わりとともに、生玉人形を操る子どもたちの遊びも変わっていったのでしょう。古くは人形浄瑠璃の演目因で、細かな役名まで設定されていたようですが、やがて、大名、三番叟、武士、爺、婆、町人、娘の七種類ほどになっていったようです。

誕生は江戸時代、芸能ともものづくりの申し子「生玉人形」

江戸時代の名物図会(『五畿内産物図会』1813年)に、摂津の名物として「とらや饅頭」「四ツ橋きせる」に並んで「生玉人ぎょう」の名と姿が美しく描かれています。人形浄瑠璃の文楽人形を模したと思われる、子どもの遊び用の小さな操り人形です。

その由来には諸説ありますが、井原西鶴、近松門左衛門、米沢彦八など、名だたる文化人が集った生國魂神社(生玉さん)があつてこそ。大人はもちろんのこと、子どもたちをも虜にした芸能文化の層の厚さと、土、竹、紙、布、塗料など、多彩な材料ともものづくりの技の集積が出て生まれた、申し子のような玩具です。



生玉人形

川崎巨泉が描いた生玉人形。大名と娘。(大正・昭和前期の郷土玩具を描いた「巨泉玩具帖」より、大阪府立中之島図書館「人魚湾文庫データベース」から)

「おもちゃ絵」の中で息を吹き返す人形たち

まちと暮らしの風景の中から、江戸・明治の面影が失われていにつれ、大量生産への批判も芽生え、郷土の文化への関心も高まりをみせます。大阪でも郷土玩具の蒐集・研究が熱を帯びていきます。その中心にいた一人が、川崎巨泉(1877-1942年)。絵師・画家・デザイナーとしての手腕を活かし、郷土玩具の蒐集と記録に精力を注ぎ、独自の「おもちゃ絵」世界を後世に残しました。

そんな世相のなか、昭和の初期まで生國魂神社近くで、前田直吉さんによって製作されていた生玉人形は、戦災によって完全に廃絶し、伝説の名玩具となってしまいました。けれども、巨泉のおもちゃ絵の中に姿をとどめ、ものづくりと文化の過去未来へと誘ってくれるのです。

「大阪くらしの今昔館」では、江戸時代の人形(玩具)屋さんで、手遊び道具の遊びを体験できます!



江戸時代の大坂のまち並みを再現した「大阪くらしの今昔館」。「人形屋 鯛屋作右衛門」さんの店先には、練人形や張子人形、お面や風車やぶらぶら太鼓(でんでん太鼓)などの手遊び道具が並ぶ。

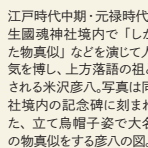
地下鉄「天神橋筋六丁目駅」③番出口直結、
大阪市立住まじ情報センター8階
開館は10時～17時(入館は16時半)、休館日は要確認
問合せ/06-6242-1170 http://konjyakukan.com

伝説の生玉人形とたどるものづくりと文化の原風景

千日前・法善寺境内で旅の役者が内職につくり始めた操り人形が原型ではとも、生國魂神社ゆかりの上方落語の開祖 米沢彦八が得意とした、大名の物真似姿を模したものが始まりではともいわれる「生玉人形」。伝説に包まれたその姿に導かれ、未来に向けて、上町台地に息づくものづくりと文化の原風景をたずねます。



※実物資料やおもちゃ絵などを参考に、再現された生玉人形(富田林市の佐々木義昂氏による)。



江戸時代中期・元禄時代、生國魂神社境内で「しかた物真似」などを演じて人気を博し、上方落語の祖とされる米沢彦八。写真は同社境内の記念碑に刻まれた、立て鳥帽子姿で大名の物真似をする彦八の図。

庶民文化を背景に老若男女が楽しんだ

文楽人形を模した生玉人形の誕生は、元禄年間(1688-1707年)までさかのぼることができるのではないかとされます。当時、境内には芝居小屋や見世物小屋が軒を連ねて多種多様な芸能が行われていたそうです。上方落語の祖・米沢彦八もその一人。子どもたちは、彦八の決め台詞や文楽の名場面の語りなどを口にしたがら、動かし遊んだのでしょうか。背景に、大阪の落語や文楽や歌舞伎など、庶民に広く共有された文化が存在していたこそですね。昭和初期まで受け継がれていた、紛れもない大阪の名玩具です。

中村文隆さん(生國魂神社 筆頭権禰宮・天王寺区)

上町台地の体験が「おまけ(豆玩)」の原点

時は下り、大正時代に上町台地で幼時を過ごし、長じてグリコのおまけ係として独自のおまけ(豆玩)文化を生み出した宮本順三さん(1915-2004年)。駄菓子屋のあてもん、緑日て売られていた張子人形や生玉人形…。とりわけ印象に残っているという、四天王寺の彼岸会に境内で人気を集めた「たこ踊り」など。ものづくりと玩具のふるさとといえる、上町台地での原体験が、「おまけ博士」の原点。戦前・戦後の子どもの心を育んだ、おまけの数々に受け継がれていたのです。

宮本順三さんが描いた「浪花郷土玩具集」。子どもの頃から集めて遊んでいた思い出の玩具の数々。中央に生玉人形、四天王寺聖堂会の木燕や猫門の土製猫、吉吉大社のユーモラスな裸體や體犬や初辰猫など、幼い頃の原風景そのまま。(国立文楽劇場蔵)

東大阪市内に開設されている「宮本順三記念館 豆玩舎ZUNZO」では、おまけ博士といわれた順三さんの世界を体験できます!

上町台地で今につながる、ものづくりの源流

商都大阪は、実はものづくりのまちでした。上町台地で繰り広げられてきたものづくりの歴史は、はるか難波宮以前までさかのぼることができます。時代は古代・中世を経て、近世・近代へ、幾多の政権交代、戦争や災害を乗り越えてなお、上町台地は人とモノが行き交う、ものづくりの拠点であり続けました。商売繁盛、無病息災、五穀豊穡、国土安穩…、人々の願いの埒場(るつぽ)ともなり、並び立つ社寺の集積は参詣者を集め、さまざまな信仰や生活文化のゆりかごともなりました。その結晶が、上町台地で生まれた縁起物(社寺の授与品)や玩具の数々です。

■瓦とともにつくられた、土人形と生活文化

現在の大坂のまちの原型が築かれていった江戸時代、大量の屋根瓦を生産するために、良質の土と水のある上町台地の一角、大坂城の南方(現在の空堀商店街界隈)に瓦の生産地・瓦屋町が設けられました。2008年に行われた発掘調査で、瓦生産の遺物のみならず、陶器生産や金属加工、ベンガラ生産に関わる資料とともに、さまざまなモチーフの土人形をはじめ、まご道具、箱庭道具、お面、コマ、土鈴、泥メンコなど、大量の土製ミニチュア玩具が出土。上町台地のものづくりの広がりや当時の生活文化のつながりを明らかにする、大きな発見となりました。



瓦屋町遺跡から出土した、江戸時代・18世紀後葉から19世紀前期の土人形などのミニチュア土製品。型も出土し、この地で生産されていたことがわかる。(写真提供:大阪文化財研究所)

■おがくずと反故紙が、大坂名物の人形に

江戸時代、瓦屋町にほど近い東横堀川沿いの材木町では製材が、農人橋界隈では農機具生産が、盛んに行われていたそうです。そこから大量に出てくるおがくずを材料に、福神さんから身近な動物まで、ユーモラスな練人形が生み出されていきました。

また、紙の需要が多かった商都大阪では、商家や版元から出てくる書き損じ等の反故(ぼこ)紙も、さまざまな張子玩具の材料になりました。病除けの虎や、鯛に乗った恵比須さんをはじめ、バラエティの豊かさ、もち運びの容易さ、丈夫さ安さ強みに、庶民の暮らしになじみ大いに愛されました。



近鉄「八戸ノ里」駅から徒歩2分、
東大阪市下小阪5-1-21山三エイトビル3階
開館は10時～17時、開館日は土・日・祝祭日(火～木は要予約)
http://www.omakeya-zunzo.com

上町台地の時空に潜む「おもちゃ絵」世界再び

明治、大正、昭和・戦前までを駆け抜けた川崎巨泉は、時代の最先端を生きたクリエイターでした。浮世絵師を振り出しに、新聞・雑誌の広告デザイナー、イラストレーターとして活躍。その感性を惹きつけてやまなかったのが、郷土玩具でした。たちまち世界にまたない「おもちゃ絵」画家兼研究者に。描いた絵は数千枚。和紙に木版多色刷りの美しい芸術作品で、かつ玩具の来歴を記す優れたデータベースです。画帖を覗いてみると、全国各地の玩具の中で輝きを放つ、大阪・上町台地ゆかりの玩具の数々が姿を現します。台地に潜むおもちゃ絵世界をめぐり、未来への架け橋になる資源に光を当てましょう。

※本紙掲載の川崎巨泉のおもちゃ絵は、大阪府立中之島図書館蔵 おおさかコレクション・人魚洞文庫データベースより、同館の許可を得て掲載しているものです。

●ものづくりの傍らに
おもちゃとお菓子のまち■「駄菓子とおもちゃ」を通して
成長する子どもたち

うちは100年以上前から高津さんの横でやっついて、のちに松屋町筋に移りました。昭和8(1933)年の御堂筋の幅で、御堂門前の人形店なども松屋町に合流してきたそうです。昔は松屋町の主流だった「駄菓子とおもちゃ」の店は、今ではうただけになりました。昔懐かしい駄菓子やおもちゃを扱って、一番力を入れているのは、子ども会活動のサポート。地域のイベントの駄菓子屋などで、大人と子どもが触れ合いながら交流を深めてもらいたいですね。

谷 澄夫さん(二カ一社長、中央区)



人相撲



飛人形はカラクリ玩具の一種、「亀山のちゃんべ」とも呼ばれ、縁日などでもよく売られており、落語にも登場する。

●おもちゃに出会う、縁日のときめき

生國魂神社 ■多彩な芸能の交差点!

聖と俗が交わる社寺の境内は、古来文化の発信地です。生國魂神社では、今でも能や落語などの芸能が盛んに行われています。上方落語発祥の地として、毎年9月には上方の落語家が一堂に会し「彦八まつり」を開催。また、境内の浄瑠璃神社は、文楽や日本舞踊・琴など、稽古ごとの上達の神様として信仰を集めています。



●受け継がれたユーモラスな味わい



大阪張子製のおもちゃ。

四天王で人気があった大道芸「たこたこ踊り」のおもちゃ。

四天王寺 ■縁起物とめぐる季節!

聖徳太子の命日に盛大に執り行われる聖霊会では、舞台上に縁起物の木燕が飾られます。また、境内のお堂をめぐる民間信仰とともに、土製の眠猫をはじめ、由緒ある縁起物の数々がお土産としても人気を集めました。毎月21日の大師会、22日の太子会、春秋彼岸会、盂蘭盆会の縁日も大いに賑わい、見世物などの風物心がときめく思い出に。



木燕

川崎巨泉の「おもちゃ絵」にアクセス!



<http://www.library.pref.osaka.jp/site/oec/ningyodou-index.html>

■消えていった、昔のおもちゃづくりと町工場

縁日などで人気のおも面、紙からセルロイドに変わり、今は主に樹脂製。また、今はもうないが、昔は生野区あたりに、ダッコちゃんやゲイラカイトとか、時々流行物をつくる町工場があったし、ブリキ玩具や菓子のおまけ類をつくる工房や、木工玩具の職人も身近にいましたね。

吉村健一さん(旭進ガス器製作所社長、生野区)

大阪府立中之島図書館
「人魚洞文庫データベース」

川崎巨泉が残した116冊に及ぶスケッチ帖は、没後、大阪府立中之島図書館に寄贈されました。「人魚洞文庫データベース」と名付けられ、インターネットで公開されています。描かれた玩具は5000種以上。郷土玩具の一大データベースとなっています。「人魚洞」は、人魚と人形を洒落た巨泉の別号。

伝説の生玉人形とたどる
ものづくりと文化の原風景

姉さま人形



髪は縮緬(ちりめん)、衣服は千代紙や布でつくった人形。



一文人形

一文人形は、安価な練りもの人形。カラフルなものが多種つくられた。

●アイデア抜群の
からくりおもちゃ

猫と鼠

釣りをしたり、梯子を登ったり、楽しい動きが特長のからくりおもちゃも各種つくられた。これは鼠を追いかける猫。

●張子人形の
職人横町(?)もあった

張子の虎

道修町の神農さんの張子の虎をつくる楠田さん(現在、守口市在住)によると、祖父とその師匠の仕事場はかつて上本町にあり、近所には張子職人の家が並んでいたそう(「大阪人」2006年3月)。

●地蔵盆は時を超えるココロの架け橋

■子どもたちに地域の夏の思い出を

上町台地は夏の地蔵盆が盛んな地域。お参りした子どもたちへのお菓子・おもちゃや賞品類も、子どもたちができるだけ喜んでくれるように選び、大人たちが汗をかいて運営しています。結局、子どもたちに、楽しかった夏の思い出を残してあげたいということになります。

服部多嘉男さん(東斎振興町会会長、天王寺区)

●路地の工房から伝統の技の新境地

■内張子技法のお面づくりに生涯をかけて

祖父は鋳物師で、四天王寺の東門付近に仕事場を持っていました。父は彫刻家で、仏像も制作。私は40年ほど前から、伝統の張子技法と異なる独自の内張子技法(外型の内側に和紙を張っていく)を開発して、お面や人形をつくっています。鞍馬山の天狗や伏見稲荷の狐など人気の商品です。かつて、ものづくりが盛んだったこの周辺。今では民芸的なものをつづっているのはここだけですね。



房本武義さん(房本デザイン芸、生野区)

●素材も技も、時代とともに移り変わる

■消えていった、昔のおもちゃづくりと町工場

縁日などで人気のおも面、紙からセルロイドに変わり、今は主に樹脂製。また、今はもうないが、昔は生野区あたりに、ダッコちゃんやゲイラカイトとか、時々流行物をつくる町工場があったし、ブリキ玩具や菓子のおまけ類をつくる工房や、木工玩具の職人も身近にいましたね。

吉村健一さん(旭進ガス器製作所社長、生野区)

※参考文献:「上方」114号 郷土玩具号(1940年6月) / 「上方」115号 郷土玩具号(1940年7月) / 肥田晴三「大阪の生玉人形」(「人形玩具研究」2000年9月、vol.11) / 樋口須賀子「小さいこはいいことだーグリンおもちゃデザイナー物語」2015年 / 「大阪春秋」147号 おおさかの郷土玩具(2012年夏) / 「大阪人」2006年3月 大阪のおもちゃ箱、森田俊雄「和(なごみ)のおもちゃ絵」川崎巨泉2010年 / 池田萬助・章子「上方の愉快なお人形」2002年 ほか

※地図は大正15(1926)年発行の「イロハ」早わかり大阪市街新圖 (地図中の赤い太線は市電網。青文字は追記事項、○は関連ポイントなど)